提言2020

岡山発の国際協力

jam tun(ジャムタン)代表　田賀　朋子氏

互いに発展目指す新形式

中学生の頃に見たドキュメンタリー番組がきっかけで、発展途上国の援助に携わりたい、と思うようになった。国連機関など大きな組織での活躍に憧れを抱きながら、大学院で貧困解決について学び、途上国の現状を体感したいと青年海外協力隊に参加した。派遣先となったのは西アフリカ・セネガルの小さな農村。生活改善を目的に2年間活動した。

支援する側でもありながら一住民として生活していたからこそ見えたことがある。憧れていた国際協力の中には、支援する側の押し付けや、現地住民の声が届かず一時的な支援にしか結びついていない、ずさんな援助の実態もあること。経済的な豊かさが、イコール「幸せ」ではないことだ。

心が豊かで思いやりにあふれ、魅力的なセネガルの友人たちを支援の対象者と見たくない、大きな組織では見過ごされがちな小さな声も聞ける意義のある活動をしたいと、帰国後、対等な立場で共に頑張れるビジネスを通したつながりに可能性を感じ「ジャムタン」というブランドを立ち上げた。

色鮮やかなアフリカンプリントと呼ばれる生地を使った洋服やポーチなどの雑貨を現地の仕立屋に作ってもらい、それをフェアトレード（公正な貿易）で輸入し岡山県内を中心に販売している。作り手には仕事への対価として賃金が届く。援助ではないため、質にこだわる。雇用や収入支援につながるからというのではなく、魅力的な商品だからという理由で購入してもらうことで、それが自然と継続的な収入へとつながる仕組みである。

顧客へはどこの誰が作ったものなのか情報発信し、作り手には購入者が商品を使用している写真を送るなど、お互いの顔が見える関係づくりにも取り組んでいる。仕立屋は収入が増えただけでなく、日本で自分の作品が受け入れられることに自信を持ち、仕事へのやりがいや向上心を抱くようにもなった。

国際協力と聞くと、海外での活動や募金などに意識が向きがちであるが、岡山にいながら、ただかわいいと思って買い物をするだけで途上国とつながることができる。むしろ地元の素材を生かした新たな国際協力や地方創生につながる可能性も秘めていると感じている。

最近は倉敷帆布やデニムなど、岡山の素材とアフリカ布を組み合わせた商品の展開や岡山の作り手とのコラボ活動にも取り組んでいる。セネガルの村落部と日本の地方との組み合わせが国際協力にもつながり、それぞれの地域の魅力発信にもなる。世界とのつながりを感じにくい地方にいながらカラフルな布を通じて外へ目を向けるきっかけにもなり、さらに外から地元を見る視点を持つ機会にもなっているのではないだろうか。

組み合わせたら面白いかもしれない、楽しいかもしれないというわくわくした感情は、かわいそうだから助けたい、衰退しているから何とかしたいというある意味ネガティブなきっかけより、力もあり持続的で無数の可能性が広がると思う。かわいそうな貧しい人たち、ではなく、魅力あるパートナーとしてお互いの発展を目指すという途上国との新しいつながり方を、岡山から広められると信じている。

たが・ともこ　1989年、岡山県矢掛町生まれ。香川大法学部卒業後、英・マンチェスター大修士課程で貧困と開発を専攻し、各種開発手法などを学ぶ。修了後に青年海外協力隊でセネガルに赴任し、2016年9月に帰国した。現地で始め、ごみ問題の啓発として端切れ布やプラスチック素材を使ったポーチなどの販売を日本でも取り組むため「jam tun(ジャムタン)」を立ち上げた。セネガルとのフェアトレード活動を手掛けている。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。